

漢方薬解明じわり

風邪や腹痛などの市販薬だけでなく、医療現場での使用が増えている漢方薬。最近では原料になる生薬の基礎・臨床研究が進む。西洋薬にはない効果と作用のメカニズムが科学的に解明されつつあり、がん治療の補助に利用する研究も始まっている。(栃尾敏)

【製造現場】

シャクヤク、カンゾウ…。ひんやりした保管庫に山積みされた袋。漂う匂いは複雑で、ゆっくり鼻から入り込んでくる。

どう効く 分析進む

このように栽培されたか、どのような工程で漢方製剤になったかをすべて把握できる」と話す。

漢方製剤メーカーの主産地は北海道、岩手、群馬、和歌山、高知。工場内の保管庫に敷地全体が東京ドーム四つ分の大きさ。顆粒、錠剤、散剤、膏剤、酒剤、三十三種類、年間約四千五百トの生産能力がある。

医療用漢方製剤の国内市場は一千億円超。ツムラはこのうち八割強を占める。花村聡副工場長は「この十年間で生産量は倍増した」と話す。

原料生薬の八割は中国から輸入する。国内管理し「原料生薬がど

五〜六世紀頃、日本に伝わり、その後、千四百年以上かかって独自に発達した。中国の

■米・臨床試験で「効果」

■がん治療利用を検証

生薬は天然物だけに安全確保は最重要課題だ。花村副工場長は「工場内の分析センターで残留農薬や重金属、微生物などの検査を徹底してやっている」と説明する。

「漢方」のルーツは中国。千八百年前に書かれた古代中国の医学書には材料になる生薬(草の根、茎、葉など)の有効成分を乾燥させたものや動物由来のもの、鉱物などの配合

が記されている。

いる。七十八の大学病。こうした漢方薬の「散」の三品目。院に漢方外来があり、特性を生かし、症状を改善することに着目した使い方をしている。漢方を治療に取り入る。現状にも詳しい千

「中医学(中薬)」と異なる日本独自の医学で江戸時代に集大成された。だが、明治以後は西洋医学が中心になり、衰退した。

最近、生薬の分析技術が向上するにつれ、効用が科学的に証明され始め「復権」。医療用漢方製剤のうち百四十八種類は健康保険の適用になった。

【融合】

西洋薬は単一成分で一つの症状に一剤を投与する。漢方薬は、生薬を二種類以上組み合わせ「大建中湯」や「六君子湯」など複数の成分を組み合わせ、科学的根拠を集積し、科学的根拠を確立する」という。ツムラ・コーポレーションが特異的に効果を発揮する疾患について、その使用のデータを収集し、科学的根拠を追求。下痢や口内炎、しびれなど、がん化学療法による副作用の軽減効果を検証すれば、がん治療を中断しなくても済むようになる。昨年、新たに二品目を追加。下痢や口内炎、しびれなど、がん化学療法による副作用の軽減効果を検証すれば、がん治療を中断しなくても済むようになる。

●記者のつぶやき

「病気を治す」のが西洋医学で、「病人(身体)を治す」のが漢方医学。西洋薬は切れ味鋭く、即効性があり、漢方薬は複数の症状に作用する」という。患者には違いや優劣は関係なし。両方をうまく治療に使ってほしい。